

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381161

研究課題名(和文)「言語活動」を生かし「PISA型言語力」を育てるための教育方法に関する臨床的研究

研究課題名(英文)Clinical study on education method to make use of "language activity", and to bring up "a PISA type language"

研究代表者

阿部 昇(Abe, Noboru)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：80323129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：OECDの生徒の学習到達度調査(PISA)の背景にある学力観のうち、特に「言語力」に関わる要素について解明を行った。主体的判断力、批判的思考力、創造的発想力などにつながる「言語力」の解明である。それを国語科、社会科など複数の教科教育にどう生かせるかを検討した。また、そういった学力を子どもたちに育てていくために「学び合い」を生かした「言語活動」の指導のあり方を追究した。

研究成果の概要(英文)：Among outlook on scholastic ability in the background of PISA of OECD, I have elucidated it about an element concerned with "language ability" particularly. It is elucidation of "language ability" to lead to the judgment, the critical thinking, the creative power. I considered how you could make use of it in Japanese, social studies. The state of the guidance of "language activity" using "grouping" was examined to train such scholastic aptitude as children.

研究分野：国語科教育

キーワード：生徒の学習到達度調査 主体的判断力 批判的思考力 創造的発想力 言語力 言語活動

### 1. 研究開始当初の背景

全国学力・学習状況調査「B問題」の背景にある学力観、平成20(2008)年告示学習指導要領の学力観のうち、推理力、メタ認知力、批判力、吟味力などに関わる言語力については、不十分な点が多い。また、国語、数学など教科相互の言語力に関する構造的連関の解明も不十分である。

上記学習指導要領では「言語活動」を重視すべきことが強調されている。それ自体は歓迎すべきものである。「言語活動」の中でも特に「学び合い」は、質の高い「言語力」の育成に有効である。しかし、その具体的な指導方法は未解明である。そのため活動だけが全面に出る授業が増える危険がある。早急に「言語活動」を生かした創造的な指導のあり方を解明する必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本の教科教育に大きな影響を与えている「PISA型言語力」の解明、及びそれを有効に子どもたちに身につけさせるための教育方法についての解明を行う。「PISA型言語力」とは、「読解力」を核とした「数学」「科学」等にもかかわる学力である。研究対象は国語を中心とするが、数学・理科の「言語力」も視野に入れた研究も行う。教育方法については、2008年学習指導要領で重視されている「言語活動」に着目する。その中でも「学び合い」を重視した指導に関する解明を全国の小中高の教師の協力を得て行う。「PISA型言語力」の育成に極めて有効な教育方法と考えられるからである。学力調査で好結果を残しているフィンランド・韓国等の教育、秋田県・福井県等の教育の調査も行いながら上記のことを臨床的に解明していく。

### 3. 研究の方法

平成25年度は、PISA「読解力」、全国学力・学習状況調査・国語B問題、学習指導要領・国語の分析・検討から入る。次いで算数・数学、理科の分析・検討を行う。その上で国語の「PISA型言語力」の試案を作成する。また「言語活動」特に「学び合い」を生かして「PISA言語力」を育てている見られる実践事例を収集し分析・検討する。秋田県・京都府、韓国等の事例を集める。それにより「言語活動」を生かし「PISA言語力」を育てる教育方法を解明する。

平成26年度は引き続き「学び合い」を生かした実践事例を収集し分析・検討する。フィンランドに訪問し、視察・研究交流を行う。また、阿部の教育方法試案にもとづき、全国の小中高の先生方に「PISA言語力」を育てる「学び合い」の授業を実践してもらう。平成27年度は実践協力を依頼しつつ、研究を総括していく。その成果を学会・研究誌等に発表をする。

### 4. 研究成果

(1) PISA学力については、問題と同時にOECDの「キー・コンピテンシ」の検討を行った。それらには、理念としては極めて先進的な要素が含まれていることが判明した。そこには「批判的思考」「批判的な思考スキル」「批判的に考察」等が中核的に位置づけられている。また、そこには「民主主義への積極的な参加」「投票権の行使」「社会的決定への参画」「社会的不平等の削減」といった要素も重視されている。さらには国連人権宣言中の「社会正義」「人道主義的カテゴリー」「人権」「国際的な平和と連帯」等を「キー・コンピテンシー」を定義づけ、選び出すための前提となる一連の実践的な価値観」として引用している。(注1)

しかし、残念ながらPISA「読解力」そのものは、実際にはその理念どおりの内実をもっていない。検査問題という限界もある。しかし、そうでありながらも、特に「批判的思考スキル」等に関わる問題・設問は弱い。

全国学力・学習状況調査・国語B問題は、ある見方に賛成か反対かを問い、その根拠を資料にもとづき応えるという設問を含む。その点では、これまでの日本の学力調査には無かった要素があり評価できる。批判的思考力、創造的発想力等につながる要素も含む。しかし、批判的に思考するといった要素としてはまだ不十分である。

平成20(2008)年告示学習指導要領・国語には「評価」「批評」「自分の考え」等、主体的判断力につながるとされる要素が教科内容として設定されている。これは戦後の1940～1950年代の学習指導要領とも共通する部分があり評価できる。しかし、ここでも「批判的思考スキル」にまで至っていない。

また、これらを通じて、構造的把握力、メタ認知力、主体的判断力、創造的発想力の要素も弱いことが判明した。

(2)「PISA言語力」のうち、国語に関する要素については、一定の試案ができた。文学については、以下のようなものである。

#### 構成・構造に関する試案

物語・小説の構成・構造も典型構成として「導入部 展開部 山場 終結部」を設定する。ただし、導入部をもたない三部構成、終結部をもたない三部構成も、典型構成として設定できる。

その山場の中にクライマックスを設定することによって、作品の主要な事件の流れが見えてくる。それが、この後の形象・レトリックの読み、吟味・批評の読みに生きる。

#### 形象・レトリックに関する試案

クライマックスが見えてくると、作品の事件の節目が見えてくる。そこに着目し形象を読み広げていく。そういう節目にはレトリックが仕掛けられていることが多い。レトリックはこれまでの国語科教育では十分に重視されていなかった。比喻などはこれまでもそ

の重要性は指摘されていたものの、その比喩のあり方によって読み方が違うというレベルまでの読みの指導は行われていなかった。阿部は比喩の下位として直喩、隠喩、換喩、提喩等を設定し、その比喩の種類により読みのあり方が違ってくことを指摘した。さらに反復法の中にもいくつかの効果があることも指摘した。語りのあり方にも着目した。これらは作品をメタ的に見ることにつながる。そして、この後の吟味・批評に生きる。

#### 吟味・批評に関する試案

これまで経験的に吟味・評価されていたことの限界を指摘し、新たに以下の吟味・批評の方法を提案した。これは大きく5つのカテゴリーに分けられる。「語り手に着目して吟味・評価する」「人物設定と事件展開に着目して吟味・評価する」「構成・構造、題名に着目して吟味・評価する」「海外作品の複数翻訳および改稿・異本などの比較により吟味・評価する」「作品を総括的に吟味・評価する」

上記の中の「語り手に着目して吟味・評価する」には、「語り手を替えることによる吟味・評価」「語り手を人物との関係を替えることによる吟味・評価」の二つが下位として位置付く。「替えることによる」とは、オリジナルの語りのあり方を替え、オリジナルと比べるということである。それによってオリジナルの語りのあり方の特徴が顕在化する。それにより吟味・評価が鋭く行える。

上記中の「人物設定と事件展開に着目して吟味・評価する」には、「人物設定を変えることによる吟味・評価」「事件展開・人物像の見直しによる吟味・評価」などが下位の方法として位置付く。

そして最終的に「作品の総括的な吟味・評価」では、作品の主題、思想、ものの見方考え方に関する総括的な吟味・評価を行う。これは批評文という形で外言化させる。

(3) 説明的文章の指導に関しては、「構成・構造に関する試案」「論理・事柄に関する試案」は省略し「吟味・批判に関する試案」のみ提示する。

これまで説明的文章の吟味・批判についても、その方法は十分に解明されていなかった。新たに以下の吟味・批評の方法を提案した。これは大きく次の6つのカテゴリーに分けられる。「語彙・表現を吟味・批判する」「事実の現実との対応を吟味・批判する」「事実の取捨選択を吟味・批判する」「解釈・推理の妥当性を吟味・批判する」「事柄相互・解釈相互・推論相互の不整合を吟味・批判する」「表現・事実選択・推理の裏にあるものの見方・考え方を吟味・批判する」

この中の「事実の取捨選択を吟味・批判する」には「他の事実の選択可能性との比較による吟味・批判」「選択された事実に典型性があるか吟味・批判する」などが下位に位置付く。これらも、最終的には評価文という形

で外言化させる。

(4) 国語以外の教科における「言語力」である。これは、上記の説明的文章の吟味・批判ともリンクする。たとえば社会科では、一つの歴史事象をどう呼ぶかといった吟味・批判が有効である。たとえば「義和団事件」と呼ぶか「義和団運動」と呼ぶかの差異を吟味することが有効である。また、同じ歴史事象の中のどの出来事を事実として取捨選択するかの差異を吟味することも有効である。

これらは社会科における言語力であり、そのまま歴史的認識力となっていく。

理科も同一の対象をどう表現しているか、同一の実験データをどのように言語で解釈するかなどを、言語表現の差異性という観点で吟味していくと様々なことが顕在化していく。

(5)「学び合い」を生かした「言語活動」が、上記述べてきた言語力を育てることに有効に働く。これは、秋田県、京都府、大阪府、茨城県、千葉県などの実践記録からも明らかである。また、フィンランドの授業でも確かめられた。

それは「学び合い」を生かした探究型の授業である。一つの典型的な形は「学習課題の設定」「自力思考」「グループの学び合い」「学級全体の学び合い」「振り返り」である。

学習課題を子どもたちと教師で決定していく。初期には教師が一方向的に提示することもあるが、少しずつ子どもも課題作成に参加させていく。これがあるために、探究の方向が明確になる。

自力で思考する時間を保障することが重要である。すぐにグループや学級全体の学び合いに入ると、子ども一人ひとりが十分な仮説を持ってないままになる。

グループは4人程度が有効である。必ず司会(学習リーダー)を設定し、全員が自分の考え(仮説)を発表し、それを深めていく。

そのグループの検討を学級に発表し、今度は学級全体で、学び合っていく。

ここまでの「自力思考 グループ 学級全体」は、矢印が逆になることもある。

そして、最後に教師と子どもで本時の探究過程を板書の助けを借りながら行う。

この学び合いには、次の5つの優位性があることが判明した。「子どもの外言化の機会が冷やか雨滴に増える」「多様で異質な見方が交流できる」「相互誘発型・相互連鎖型の思考が生まれる」「共通性・一貫性に向かう思考が生まれる」「相違・対立による弁証法的思考が生まれる」

これらは、授業記録を詳細に分析することで明らかになってきた。特に記録を学級全体だけでなく、グループの学び合いにも広げることによりはっきりしてきた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

阿部昇、秋田県の学力向上の取り組み 全国学力・学習状況調査、7年連続トップクラスの要因、信濃教育 1544号、査読無、2015、1-8

阿部昇、「アクティブ・ラーニング」の展開可能性と課題 「探究型授業」そして「学習集団」、研究紀要 16号(「読み」の授業研究会、査読有、2015、67-78)

阿部昇、「試行錯誤しながら探究する」という学習習慣、教育研究 1347号(筑波大学附属小学校・初等教育研究会編) 査読無、2014、18-21

阿部昇、その単元その時間で身に付けさせる国語の力の具体を意識する 私たちは、今、国語科教育のターニングポイントに突っ込んでいる、子どもと創る国語の授業(全国国語教育研究会編) 査読無、2014、44-47

阿部昇、教科内容・教育方法からの「学びの共同体」についての批判的検討、国語授業の改革 14号(「読み」の授業研究会編) 査読無、2014、110-116

阿部昇、「単元を貫く言語活動」は「活動主義」を導き出す可能性をもつ、国語授業の改革 14号(「読み」の授業研究会編) 査読無、2014、86-91

阿部昇、いまこそ授業で身につける「国語の力」の再構築が求められている 権利保障としての国語の授業の創造、国語授業の改革 14号(「読み」の授業研究会編) 査読無、2014、6-19

阿部昇、全国学力・学習状況調査「国語」で秋田県はなぜトップを続けているのか、月刊国語教育研究 508(日本国語教育学会編) 査読無、2014、48-49

阿部昇、全国学力・学習状況調査の結果を教育実践にどう生かすか 秋田県トップクラスの要因分析に基づいて、教育方法 42号(日本教育方法学会編) 査読無、2013、25-39

[学会発表](計3件)

阿部昇、アクティブ・ラーニングの危うさと展開可能性、日本教育方法学会・岩手大会・課題研究、岩手大学、2015

阿部昇、NIEは豊かな思考力・判断力を育てる 教育と新聞の緊密な関わりは必然、韓国・NIE大会基調講演、韓国慶州 K ホテ

ル、2015

阿部昇、学力調査結果から考える学力向上要因 フィンランドの教育を視察して、日本家庭生活研究協会主催・教育シンポジウム基調講演、アルカディア市ヶ谷、2013

[図書](計3件)

阿部昇、豊田ひさき、大槻和夫、折出健二、深澤広明、小川雅子、福田淳志、吉田裕久、吉田成章、鶴田清司、間瀬茂夫 成田雅樹、他、国語授業の改革 15(「読み」の授業研究会編)全188頁、学文社、2015(担当は「『言語活動』そして『アクティブ・ラーニング』をどうとらえたらいいのか」6-13、および「教材研究のポイント『スイミー』(レオ=レオニ)」183-190)

阿部昇、国語力をつける物語・小説の「読み」の授業、全287、明治図書、2015

阿部昇、井上一郎、折出健二、田近洵一、藤原幸男、佐渡島沙織、青山由紀、浜本純逸、菅原実、足立悦男、藤森裕治、甲斐雄一郎、中川一史、他、国語授業の改革 13(「読み」の授業研究会編)全188頁、学文社、2013(担当は「『言語の教育』としての国語科教育と『言語活動』6-17)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

阿部 昇 (ABE Noboru)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：80323129

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：